

## 黒部市若栗小学校 教諭 松原 隆志

(国後島) 平成16年度 北方四島交流教育関係者訪問 事業

### 【事前研修会 第1部 (千島会館)】

講話「元島民が語る北方領土一島に思いを寄せて」市川 清寿氏 (国後島出身)

〈国後島の資源や自然環境〉

- ・水産資源が豊富であり、戦前は、カニの缶詰、昆布、ホタテ、ホッケなどの水産加工に従事していた。(魚がたくさんいる。花咲ガニ、カジカ、カレイなど)
- ・木材、鉱物資源も豊富である。しかし、戦争により輸送が止まり、昭和16年閉山した。
- ・温泉が豊富である。温泉地域は聖域と考えられていた。
- ・自然環境がよく、野鳥や昆虫が多く楽園であった。

〈戦後のソ連軍の侵攻〉

- ・昭和20年9月1日ソ連兵が上陸し、占領された。  
(写真を見せて、上陸の場所や島の様子を説明された。)
- ・船で脱出する人が多かった。しかし、遭難する人もいた。
- ・元島民は、高齢化しており、若者へ受け継いでいかなければならない。北方四島は、島民のものではなく、国の財産である。市川さんは、元島民としての思いや昔のことを熱く語られた。

〈北方領土とは〉

- ・日露間の交渉内容について資料集を使って説明。北方四島が日本固有の領土と言える訳。
- ・ビザなし交流・・・日ソ共同声明(1991年)で確認し、1992年から始まった。教育関係者は1999年から実施され、今年度までに日本側から141回、6,268名の訪問がある。  
(しかし、枠組みがあり、誰でもいけるわけではない。)

### 【事前研修会 第2部 (友好の家)】

講演「国際情勢から見た島の領有権について」 拓殖大学 茅原 郁生 教授

- ・20世紀は革命と戦争に時代であった。21世紀は、IT、金融などグローバル化の時代である。しかし、主権国家は20世紀と変わりがない。
- ・北方領土は、ロシアに莫大なる富を与えている。
- ・現在、世界の様々なところで領土問題が起こっている。
- ・民族と国境が一致しないところがある。(インドネシア、東ティモールなど)
- ・領土問題は、国家の威信であり、アイデンティティーの問題である。
- ・日本は、領土に対して無知であり、甘さがある。
- ・日本の領土問題は、アヘン戦争の勃発から始まっている。また、ロシアの南下政策を防ぐため、日清・日露戦争で拡大し、ポツダム宣言、サンフランシスコ条約で矛盾が生じている。
- ・沖縄の復帰は、当事国の問題ではなく、国際的な政治に影響されている。
- ・竹島(韓国との問題)、尖閣諸島(中国との問題)などの領有権は、感情的なものである。

### 【「ルイブカ」幼稚園視察】

バールジナ・タマーラ園長代行が説明して下さった。

- ・ 1984年設立。国の援助がないので、改築はできないが、南クリル地区の中では恵まれている方である。(おもちゃもたくさんあり、遊戯室と寝室が別々になっている。)
- ・ 遊びを通しての授業が中心である。環境教育として、花を植えたり、自然と親しんだりしている。また、体育や音楽の学習も行っている。言語教育として、絵本の読み聞かせをしたり、お話をしたりしている。年収に余裕のある人から、新しいプログラムを行う予定である。
- ・ 保育料は、給食費を含め月900ルーブルであるが、1500ルーブルに値上げする話がある。
- ・ 南クリルの子供たちは、増加傾向にある。幼稚園は義務教育ではないが、5、6歳の子供たちは、小学校入学前なので、できるだけ入園してもらっている。70人余り入園しているが、いつも通園しているのは50人ほどである。現在3クラスで行っているが、この人数から考えると、4クラスにしたい。
- ・ 保育士の給与水準は余り高くない。だから、子供の好きな人が保育士になっている。男の保育士はいない。

### 【公立教育機関「教育センター」視察】

ダリンスカヤ・アレフチーナ・ニコラエヴ校長が説明をしてくださった。

- ・ 夜学の学校だったが、12年前に教育センターとして開校した。教育センターと言われているが、7年生から11年生までの生徒が通っており、日本で言うと中学校と高校を合わせたものである。
- ・ この地域には生徒数400人位の中学校がある。センターには普通の生徒も通っているが、問題行動を起こした生徒、職業訓練を受けたいと希望する生徒など70人程通っている。
- ・ 職業訓練も行っている。需要によって、職業訓練の内容も変わってくる。職業安定所とも連携している。
- ・ 専門性を高めるため、それぞれの企業に入っている人が、先生になっている。
- ・ 文学、化学、物理、数学、自動車訓練などの教室があった。実験室などはなく、その分テレビ、ビデオ、パソコンなどで授業を補っている。
- ・ ロシアでは、共通テスト導入の動きがある。
- ・ 旧ソ連時代は、校長になれるのは歴史の先生で男性に限られていたが、現在では、女性の校長もたくさん出てきた。

### 【郷土博物館見学】

バビコワ・タチアナ・アレクサンドロブナ館長に出迎えられ、説明を受けた。団体や個人の寄付により、アパートの一部を利用した郷土博物館である。内部には、山の動植物、海の生物、昔の生活必需品の道具など居住環境を示す資料約5,000点がコーナー別に陳列されている。

北方四島は、非常に多種多様な動植物が生息しており、動植物の楽園である。また、鉱物資源も豊富である。火山活動の活発であり、色丹島地震では、震度9（日本では震度5～6程度）、3～5mの津波が打ち寄せ、それ以来人口が半減した。

### 【意見交換会（行政府ホール）】

〈南クリル地区の教育制度〉

- ・ 義務教育は9年間で、5、7年に中間テスト、そして卒業テストがある。
- ・ 各学校には、パソコンが入っているが、インターネットがつながる学校は教育センターだ

けである。

- ・ 9～5月が課業時、6月が卒業テスト、7～8月が夏休みである。夏休みの子供たちの過ごし方は行政府の仕事で、キャンプなどの行事を行っている。
- ・ 地震により、多くの学校が倒壊した。未だに修復されていない。

#### 〈意見交換 Q&A〉

Q：オリンピックでの活躍は素晴らしかったが、体育の学習は？

A：子供たちの興味に合わせて、リレーなどを行っている。スポーツ施設は余り充実していない。

Q：親からの相談や先生方が困っていることは？

A：心理学の専門家がいないので、教員が助言を行っている。教員で対処できない場合は、地区の行政機関、親権を剥奪しなければいけないときは、裁判所に相談するようにしている。

Q：子供たちの健康診断は？

A：年1回、病院で生徒、教員がすべての診療科で受診している。健康状態で進路も考えている。幼稚園の職員は3か月に1度受診している。学校へ行けない子供たちは、訪問教育を行っている。

Q：愛国心教育の実態は？

A：主に歴史教育の中で行っている。旧ソ連時代と違って、新しい教科書、現実にあった内容になっている。担任も、憲法、国旗、国歌などについて教育している。

Q：学力向上のための方策は？

A：子供の成績について、親からの相談が増加している。生徒が希望すれば、放課後個別指導を行うが、ほとんどは家庭教師を雇って、遅れなどを補充している。

Q：テストでだめな子供はどうなるのか？

A：年間成績を見て補講を行う。5段階のうち2が1つか2つだったら、条件付で進級。それ以上の場合は落第である。

Q：交換交流の感想は？

A：子供たち同士はすぐに仲良くなった。高学年の子供たちは、大人と一緒に少し時間がかかった。食事では、和食が余り口に合わなかったようである。

Q：先般の小泉総理の船からの視察については？

A：テレビでみんな知っている。しかし、学校ではまったく話題になっていない。子供たちは、政治問題には余り関心がなく、北方領土問題はここの子供たちには存在しない。ロシアと日本との間には北方領土問題が存在するが、これは大人の問題である。子供たちを大人の問題に巻き込みたくない。

最後に参加者全員で「カチューシャ」を歌い、意見交換会を終えた。

#### 【「ロウソク岩」視察】

砂浜からそびえ立つ姿から「悪魔の指」といわれ、観光名所となっている奇岩である。「悪魔の指」と言われるだけあって、この岩だけがそびえ立つ風景は異様であった。

海岸には、多くの昆布が打ち上げられていた。また、アザラシが私たちを迎えてくれた。遙か遠くには知床半島も望むことができ、豊かな自然と資源の豊かさを目の当たりに感じた。

## 【ユジノクリリスク水産コンビナート視察】

アチャーシェフ・セルゲイ・ワリシエビッチ副社長に説明していただいた。

- ・サケ・マスの加工、イクラの塩漬けなどを行っている。
- ・偶数の年は豊漁だと言われているが、今年は暑い夏だったので、カラフトマスは不漁だった。サケに期待している。
- ・雇用者は常勤が30人である。今年はアルバイトを80人ほど雇用したが、不漁なので、現在40人ほどになっている。
- ・市場は、ロシア内だけである。将来的には日本への輸出も考えている。
- ・日本への密猟者が多いので、困っている。
- ・南クリル地区の財源のほとんどが水産加工によるものである。(国後島の約85%) 国後島には他にも3社ほどある。南クリル地区は、赤字財政で、州からの助成や国の地熱発電、空港、モスクワの会社との提携等で補われている。

## 【ホームビジット】

ホームビジット先は、マツェベラ・ナジェージダ・ウラジミロブナさん宅だった。マツェベラさん夫妻は友好的の家まで迎えに来てくださった。そして、「ろうそく岩」、「瀬石の部落が見える所」など、島の名所を案内してくださった。瀬石の部落の見える場所には、砲台があり、そこからは旧ソ連軍が上陸してきたという場所が一望できた。

マツェベラさんとは、よく似た名前だということで意気投合した。片言のロシア語であいさつしたり、会話をしたりした。そして、以前ホームビジットした方が、たまたま私の知り合い人だったことやマツェベラさんが富山県を訪問したことがあるなど、思いがけないことが重なり、とても楽しく交流することができた。

しばらくして、近所のイオラさんという日本語に堪能な方が遊びにこられ、さらに会話が弾んだ。始めは、言葉が通じないという不安をもったホームビジットだったが、全くその心配はなく、家族みんなで作ったたくさんのおいしい料理をいただきながら、楽しい一時を過ごすことができた。心温まるもてなしに心より感謝したい。

## 【墓参（古釜布墓地）】

日本人が四島を訪問するようになってから、墓地の方も手入れがなされるようになったようだ。しかし、身内からの墓参がないことを思うと、とても残念に感じられた。幼い頃亡くなった父の兄弟の墓が多楽島にあると聞いている。戦後、誰一人として墓参していないことを考えると悲しさと憤りを感じた。祖父母や父たちの思いは筆舌に尽くし難いものであっただろう。

## 【ニキシロ湖・アリゲル湖視察】

国後島にあるカルデラ湖のニキシロ湖とアリゲル湖を視察した。ニキシロ湖はとても大きくあたかも入り江のようにさえ感じられた。しかし、水を舐めてみると塩分は感じられなかった。

アリゲル湖では、湖畔に流れる小川を溯上するカラフトマスの群れを見ることができた。「眠れる美女」と呼ばれる羅臼山とアリゲル湖がマッチして素敵だった。また、この辺り一帯には、ハマナスが群生していた。その小高い丘を登るとすぐ目の前に知床半島が見られた。島と北海道とがあまりにも近いのに改めて驚きを感じた。

### 【材木岩視察】

車を降り、海岸を歩いて材木岩に向かった。途中、ここで漁をしておられる漁師さんの小屋を見せてもらったり、海岸で水産物をとっておられる人に出会ったりした。私が住んでいる黒部市生地の対岸は能登半島や氷見のほうに当たる。だが、ここからは見ると、知床半島がそれよりももっと間近に見られた。磯には、ヤドカリや小さな生物などがたくさんいた。車を降りてから、1時間ほど海岸を歩いた。ようやく、古代、知床と国後をつなぐ石の巨大な橋が架かっていたという伝説を持つ柱状節理の奇岩、材木岩に着いた。五角形や六角形の奇岩がそそり立つ光景は私には初めて見るものであった。

1時間ほどかけて車のところまで戻った。わずか1時間余りのことで、潮が満ち砂浜がなくなっていたので、びっくりした。戻るや否や、取れたてのおいしいウニをいただいた。私たちが材木岩に行っている間に磯で取ってきてくださったそうだ。また、行く途中にバーベキューをしておられる人を見たが、これらの方々は、私たちの昼食を用意してくださっていたことを知り、恐縮した。

### 【子供芸術学校（音楽学校）視察】

リュドミーラ・コズロワ校長が説明してくださった。

- ・情操教育を通して道徳心を育てている。
- ・南クリル地区の13%の子供たちが通っている。
- ・現在、ピアノ科、民族楽器科があるが、今後合唱科、舞踊科を創設する予定である。
- ・コンサートでは、ピアノ、バイアン（アコーディオンに似た民族楽器）を演奏してくれたり、ロシアの歌やキロロの「ベストフレンド」、「大きな古時計」などを歌ってくれたりした。

### 【反省会】

長嶺団長の提案で、解団式を行う予定の時間が、ホームビジット先での交流の様子を話し、情報交換を行う時間になった。各グループの代表が昨日のホームビジットでの交流の様子を発表し合った。訪問先では、もてなし方は様々であったが、互いの立場や考え方を伝え合い、楽しく交流を深めることができたようだ。

また、今回の交流訪問を通して、教育関係者として今後どのように活動し、子供たちに伝えていくか、どのように教材化していくかなどについて話し合った。

### 【解団式】

長嶺団長をはじめとして、今回の訪問を終えての感想を5名の代表者が発表した。私もその一人に選ばれた。私は今回の訪問交流の団員の中で唯一元島民の子供だった。私は、昨日の新聞記者（北海道新聞、ジャパントイムズ、朝日新聞）から受けた取材でも話したように、父の遺志や父から聞いた話などを話したり、今回の訪問で見聞きしたことなどを千島歯舞居住者連盟の会員として、また教員として、どのように我が子や子供たちに伝えていくか、またどのように返還運動に参加していくかなどについて自分の思いを述べたりした。（感想を参照）

### 【感想】

私の祖父母や父は、戦前、歯舞群島の多楽島で昆布漁を行ってきた。生前、父は当時のことを思い浮かべ、島のことをよく話してくれた。昔は今以上に水産資源が豊富で、たくさん昆布、カニ、魚などがたくさん取れたらしい。父は、北洋のサケマス漁船に乗っていたが、私が生まれ

てから、生地で4～5人の若い衆を雇って、エビ・バイガイ・カニ・イカ漁などを行っていた。島が返還されたら、「父ちゃん一人でもいいから、島へ行って仕事をしたい」「島へ行ってみたい」と言っていた。

私は、今回、交流訪問事業の団員に選ばれ、父の写真をポケットに入れて参加した。船（コーラルホワイト号）の中から父と一緒に北方領土を見、そして国後島に上陸することができた。「島に行きたい」と言っていた父の遺志の一つ達成できたことが私にとって何よりも嬉しかった。

実際に島に来て、この島の素晴らしさを目の当たりにすることができた。自然環境がよく、とても多く水産資源がとても豊富であることを実感した。アザラシが私たちを迎えてくれたり、コンブがたくさん打ち上がっていたり、カラフトマスの遡上などを見たりすることができた。材木岩、湖など、どこへ行ってもほとんど人間の手が加えられておらず、自然が荒らされていないのには驚いた。日本に返還されたら、企業が営利目的のために自然を破壊したり、資源を取り尽くしてしまったりしないように、国が責任を持って環境保全に力を注いでほしいと思った。

国後島からは、知床半島が間近に見えた。30年前に納沙布岬から歯舞群島を見たときもっと間近に見えたことを思い出した。また、当時はサケ・マス漁がさかんで、根室の町にもすごい活気があった。返還されれば、北方四島への中継地点としてたくさんの人でにぎわうだろう。北方四島は今は近くて遠い四島だが、一日も早く本当に近い四島になってほしいと願った。

訪問中に、日本人が強制送還されたことを「天皇陛下が帰ってことと言われたので、日本人は帰っていった」という話を聞いた。また、意見交換会では、小泉総理の視察について、「子供たちは、政治問題には余り関心がなく、北方領土問題はここの子供たちには存在しない。ロシアと日本との間には北方領土問題が存在するが、これは大人の問題であり、子供たちには大人の問題に巻き込みたくない。」という話があった。領土問題は、必ずしも大人だけの問題ではなく、次代を担う子供たちの問題となってくる。子供たちにしっかりとした事実を教え伝えていかなければならないと痛感した。それと同時に、外交が大切であることとそれを支え、盛り上げていくための世論の結集が大切であると感じた。

今回の交流では、たくさんの交流があった。訪問団の方々との出会いだ。日本中に仲間を作ることができた。そして何よりも忘れられない、ロシア人との交流である。ホームビジット先のマツベラさん一家やイオラさん、2日間運転をしてくださったイエリーナさんと旦那さんなどだ。初対面の私たちに、いつも優しい笑顔で対応してくださる心遣い、家族みんなで作った料理での心温まるもてなしなどに感激した。言葉は通じなくても、お互いに分かり合おうとする気持ちがあれば、ある程度意思は通じ合うものだ。これからも、交流訪問事業を続け、親しく交流し合うことが大切であると思った。しかし、「北方四島は、日本とロシアの平和を象徴する四島であり、返還が国民の悲願である。返還されてはじめて真の友好が始まるのではないだろうか。」という思いは今も変わらない。

訪問を終えた今、元島民の子供として、父から聞いた話や父の遺志、祖先の生き様などを我が子にしっかりと伝えていかなければならないという使命を感じた。また、千島歯舞居住者連盟の会員として、また教員として、今回の訪問で見聞きしたことや歴史的な事実を子供たちに正しく伝えていくことの大切さを知った。父は、生前千島歯舞居住者連盟の世話をしてきた。その父の遺志を受け継ぎ、今後自分は何ができるかを考え、返還運動に積極的に参加していきたい。

今回の訪問に際し、機会を与えてくださった関係諸機関、また訪問中お世話していただいたスタッフに心より感謝します。誠に有難うございました。